「のびのびキャンプ in 秋さんべ」

1　趣旨

秋の自然との親しむ野外活動を通じた「生活・自立」を支援する取組を行い、親子の親睦を深めるとともに、子供たちの基本的な生活習慣の確立を目指す。

2　事業の概要

(1) 期間

令和６年 10 月５日（土）～ ６日（日）＜１泊２日＞

(2) 会場

国立三瓶青少年交流の家

(3) 協力

島根県健康福祉部青少年家庭課

(4) 対象

ひとり家庭の親子

(5) 参加者

20 家族 47 人　※募集 20 家族 50 人程度（28 家族 70 人応募）

(6) 日程・内容

時間	10 月５日（土）	時間	10 月６日（日）
11:30	受付、はじまりの会 レクリエーション	6:30 7:00	起床 朝のつどい
12:20	昼食（ビュッフェ）	7:20	クリーンアップタイム
13:30	交流の家発	7:40	朝食（ビュッフェ）
14:20	赤来観光りんご園　着 りんご狩り	9:15	アウトドアクッキング ～ダッチオーブンで作るアップルパイ～
17:10	夕べのつどい	11:30	終わりの会
17:30	夕食（ビュッフェ） 入浴		
19:00	【親】親学プログラム 【子】創作活動		
20:30	入浴、就寝準備、就寝		

3　事業の特色

(1) プログラムデザインと企画のポイント

<u>①　三瓶周辺地域の教育資源を生かした秋ならではの体験活動の設定</u>

本事業では、大きく以下の２点を意識してプログラムを設定した。

◆　当所が所在する三瓶地域及びその周辺地域の豊富な教育資源を生かした季節感のある自然体験活動を提供すること。

◆　ひとり親家庭であることから、なかなか親一人では子供たちを連れて行くことができず、体験する機会が少ないと思われる活動を取り入れること。

また、上記２点を踏まえて２つのメインプログラムを設定した。

【りんご狩り】

昨年度に引き続いて初日のメインプログラムとして、三瓶地域にある飯南町の「赤来高原観光りんご園」でのりんご狩り体験を設定した。このりんご園では、9 月上旬から 11 月中旬にかけてりんご狩りを楽しむことができる。本事業の開催日は、まさにりんごが旬の時期であり、参加者は多くの種類のりんご狩りを通して、秋の味覚を堪能することができると考えた。また、昨年度の参加者から大変好評であったことからも、りんご狩りは、ひとり親家庭ではふだんなかなかできない体験として、参加者の目に魅力的に映る活動であると考え、継続実施した。

【アウトドアクッキング～ダッチオーブンで作アップルパイ～】
昨年度の参加者からは「野外炊飯に取り組み、自分たちで作るご飯をたべたい。」という意見があり、野外調理をしたいと感じている親子の存在が明らかになったため、今回は2日目のメインプログラムとしてダッチオーブンを使ったアップルパイ作りを設定した。このダッチオーブンを活用したアウトドアクッキングを通して参加者が前日のリンゴ狩りの活動と関連付けることにより、一層、秋の自然に親しむことができると考えた。また、近年、デイキャンプへの関心が高まっていることもあり、「次は家族でデイキャンプをしてアウトドアクッキングにも挑戦したい。」と考える家族が現れるなど、体験活動の普及啓発につながることも期待して設定した。

② 親学ファシリテーターによる親学プログラム

一昨年度までの本事業では、子供たちが別会場で活動している間に母親たちが茶菓子を食べながら、ふだんの生活の様子や困っていること、他の母親に聞いてみたいことなどをざっくばらんに話ができる場をつくりたいと考え、「カフェタイム」の時間を設定していた。昨年度は、この「カフェタイム」の実施方法を引継ぎつぎながら、親同士のより活発な交流を促し、参加した親たちにとって一層充実感に満ちた時間にしたいと考え、親を対象としたプログラムの実践経験が豊富な地元大田市在住のファシリテーターによる「親学プログラム」を実施した。昨年度の参加者からは、「親学プログラムでは、たくさんの方と子育てについて話し合うことができ、子育てについての相談ができました。」「話をすることで少し気持ちが楽になりました。」などの声があがっており、親同士の語らいの場としてのねらいを十分に達成できる時間になった。そこで、今年度も継続して実施することとした。

【「親学プログラム」について】
島根県立東部・西部社会教育研修センターが行う主に乳幼児から中学生までの子供をもつ親（保護者）を対象とした学習プログラムであり、親としての役割や子供との関わり方の気付きを促すものである。

(2) 運営（連携）及び広報のポイント

① 運営（連携）のポイント

本事業では参加者の家庭事情への配慮や心情に寄り沿った支援など留意事項が他事業よりも多いため、本事業への参加経験があり、かつ、事業趣旨や支援に当たっての留意事項への十分な理解がある法人ボランティアに直接声を掛け、事業参加を依頼した。

また、参加する子供の実態に応じた支援の充実のため、島根県公立学校職員採用2年目の職員を対象とした研修（フォローアップ研修）の1つに登録し、希望する教職員がボランティアスタッフとして活動できるようにした。

さらに、当日朝には当所職員を含むスタッフ全員で参加者支援の留意点と対応方針の共有に努めた。

② 広報のポイント

今年度も、島根県健康福祉部青少年家庭課ひとり親支援グループに広報活動への協力を依頼し、島根県内各市町村の子育て支援関係各課を通して本事業の開催要項やチラシを配布するとともに、メールマガジン等に本事業のお知らせを掲載することにより、多くのひとり親家庭保護者に本事業の情報が届くようにした。

また、年度始めに島根大学で行われたボランティア説明会で知り合った「フードバンクしまね」事務局長からも本事業の趣旨に対する賛同を得られ、広報に協力いただけることになった。そこで今年度は、当該団体にも事業開催要項とチラシを送り、フードバンク利用家庭にも情報を届けられるようにした。

4 参加者へのアンケート結果

(1)アンケートの集計 (%)

	満足	やや満足	やや不満	不満
事業全体	94	6	0	0
プログラム	89	11	0	0
運営	100	0	0	0
職員の対応	100	0	0	0

（2）参加者の声

≪肯定的な意見≫

○　この事業について全く知らなかったですが、思い切って参加して良かったです。

○　初めて知りましたが、とても楽しいイベントでした。親も子もとても楽しかったです。

○　なかなか母子ではできない体験でした。

○　無料でここまでのプログラムを体験させていただき、感謝です。子供にとっても良い思い出になったと思います。

○　他のお母さん達も同じような悩みをもっていて、自分だけではないことが分かり、心強く感じました。

○　同じ境遇の方がどのように生活し、どのような考えや思いをもって日々生きているのかがとても知りたくて参加しました。夜だけではなく２日目はいろいろな方のお話することができて、どの方もお子供たちのことを大事にしてがんばっているのがひしひしと感じられました。

≪提案や要望などの意見≫

○　親学プログラムで、シングルマザーの大変さを分かち合えたら良かったです。そこにふれなかったのが少し残念でした。

○　今年抽選の結果、来られなかった友人が、以前のように年２回開催したり、少し料金もとるなどしてたくさんの人が参加できるようになっていたりするといいなと言っていました。

○　もう少しスケジュールにゆとりがあると良いなと感じました。子供は自由時間がほしいようでした。

○　ひとり親ではなかなか子供に体験させてやれないので、果物狩り、釣り、サイクリングなどのアウトドア系のイベントがあれば今後参加したいです。

5　成果と課題

＜成果＞

○　ひとり親家庭親子のニーズを満たす体験活動を提供できた。

参加者の声に「ふだんできない体験ができた。」とあるように、参加者満足度が高い秋の自然と親しむ体験活動を提供することができた。また、「なかなか母子ではできない体験だった。」などとの声にあるように、子供の活動を見守る親が一人しかいないという、ひとり親家庭ならではの困り感があり、ニーズが高い体験活動を提供することができた。

○　本事業に対する期待の大きさを再確認できた。

今年度も本事業には、抽選が必要なほど多くの応募があり、その大半が初めて参加する家庭であった。また、このうち数件は「フードバンクしまね」からの情報提供で興味をもち、応募した家庭であった。さらに、応募段階では、前述の「フードバンクしまね」以外のフードバンク運営団体からも当事業に対する問い合わせがあり、この中で「アウトドア系の体験を望むひとり親家庭が多いので、このような事業を是非行ってほしい。」と事業実施を後押しする声があった。

これらのことからも、本事業に対する期待の大きさを再確認することができた。

○　活動を通して子供同士、親同士の活発な交流を生み出すことができた。

今回の参加者は全て母子家庭であり、母親と子供 1 人か 2 人で多くても 3 人での参加であった。また、子供が幼児の家庭も複数あった。そこで親が子供の様子を気にかけながらの作業は厳しいと判断して、２家庭で１つのアップルパイを作ることにした。このように２家族で１つのアップルパイを作るようにしたことにより、親の負担軽減につながっただけではなく、子供が火を管理して親がりんごを煮詰めるのを分担して活動する様子が多く見られるなど、子供同士、親同士の活発な交流を生み出すことができた。

子供同士の関わりの面では、参加した子供が幼児から高校生まで年齢の幅が広かったことから、夜の創作活動で中高生が幼児や小学生の様子を気にかけてサポートするなどの異年齢交流が促された。

親同士の関わりの面では、初日夜に親同士の語らいの場として「親学プログラム」の時間を設定したことも、2 日目のアップルパイ作りの活動で親同士の交流促進の一因として大きかったと考える。

○　研修の一環として参加した教員の専門性を生かせる場を設定できた。

初日夜の子供の創作活動の時間については、フォローアップ研修の一環で参加した教員主導で運営する時間とした。会場準備と支援体制の決定から教員主導で行うことにより、教員の専門性を発揮する機会になり、子供たちへの支援の充実を図ることができた。また、教員にとってもやりがいのある充実した時間になった様子であった。

＜課題と今後の対応＞

▲　対象年齢を要項やチラシに明記すること。

今回は、要項やチラシに対象年齢を明記はしなかったが、主な対象は幼児から小学生のいる家庭を想定していた。要項やチラシに対象年齢を明記はしなかったことにより、幼児から高校生まで幅広い年代の子供たちが集まり学年交流が促されたという良い面があった一方で、募集受付時には、応募を検討する家庭から幼児の参加が可能かと問い合わせを受けたことがあった。また、運営側も子供の年齢に応じた様々な支援策を検討する必要があった。今後、プログラム内容によっては対象を明確にし、開催要項やチラシに明示する必要がある。

▲　青少年家庭課への情報提供をもう少し早めること。

事業後に雲南市の子ども家庭支援課から雲南市からの申込み状況について問い合わせあり、8月にひとり親家庭全戸連絡することがあるため、7 月頃に事業の情報提供があると各家庭に連絡しやすいとの助言を受けた。今年度は 8 月に入ってから県青少年家庭課に開催要項とチラシのデータを送ったが、来年度も同様に 10 月頃に本事業を開催するときは、7 月には県青少年家庭課に情報提供できるようにしたい。

▲　ひとり親家庭保護者のニーズに沿った親学プログラムテーマを設定すること。

今回は、「ひとり親」という点を強調せず、一保護者という点での語らいの場として親学プログラムの時間を設定した。親同士で語り合う機会をもてたことから、親学プログラムに対する満足度は高い様子であったが、参加者の中にはひとり親家庭の現状について語り合いたかったと感じる人もいた。今後は、親学ファシリテーターと相談の上、ひとり親家庭ならではの悩みや大きな不安の軽減につながるようなテーマの設定も検討したい。

▲　活動時間と休憩・ゆとりの時間とのバランスを考慮した日程にすること。

「スケジュールの余裕がほしかった。」という参加者の声があった。これが、今回初日午後にりんご園での活動を予定し、行き帰りの移動で合計 1 時間 30 分程度を要したことが要因であったと考える。十分な活動時間と休憩・ゆとりの時間とのバランスを考慮した日程を検討する必要がある。

来年度以降の本事業の実施に当たっては、ひとり親とりわけ母親ひとりでは前述のとおり子供に体験させる機会をもちにくいアウトドア系の活動イベントへの要望が多いという実態も踏まえてプログラムを設定したい。また、自然や観光などの地域資源豊富な三瓶の強みを生かして、当所周辺を活動場所とすることにより、移動時間を少なくして、活動時間と休憩・ゆとりの時間の確保の両立を図るとともに、通常の研修支援で提供するプログラムの充実にもつなげたい。

（担当：企画指導専門職　向原　将平）